

そして終戦であるが、その日、非常召集があった。昭和二十年八月十六日、終戦の翌日だった。まだ誰も日本が戦争に敗けた事も陛下の放送も聴いていなかった。その非常召集が私共の考えられないことだった。朝四時頃、前の松林に集合させられた。そこに長いテーブルがあり、銃と拳銃が並べてあり、一人の将校が名前を呼ばれた人だけに「今日からは君達の判断で銃を使うか使わないか選択して行ってもらいたい」と言い、転属命令書を渡され家に帰った。

以上は、体験記筆者の思い出の要約記録であるが、東北の寒村に育ち、国策に沿って、かつ自分の雄飛を望んで大陸へ入植する。しかし、その満州入植は、満州防衛も兼ねた国策の流れの中のものであった。

戦争前の農村の環境、そして国策に沿って動かされた、当時の日本の縮図をみるような記録である。

私の軍隊生活（その三）

愛知県 河村 廣康

便り

故国を後に海山越えて遠い異国の満州へ。

毎日の激務に追われている者にとって、一番の楽しみと励ましになるのは内地からの便りだ。夜の点呼の後「書簡を伝達する」との週番下士官の声に、自分達初年兵は、それぞれの仕事をしながら期待に胸を膨らませて耳をすます。今に俺の名を、次はきつと俺の名を呼んでくれると……「以上、終わり！」の声はなんと無情に聞こえたことか。

それにひきかえ「河村二等兵！」と呼ばれたときは「ハイッ！」と自分でも驚くほどの声が出る。手紙を手にするとき、ハガキか封筒かも楽しみの一つ。また、家からか、友からか、それとも？と期待するのも大きな楽しみである。少しでも故郷

のことが知りたい。封筒の中に残る僅かの空気と匂いを吸いたい。

小学校六年生の姪の一代が書いたたどたどしい鉛筆の跡、「家のことは心配せんでもええ、お前は自分の体に気をつけよ」と、いつも決まり文句の父の言葉をそのままに書いてあるのがほとんどだった。いらぬ心配をかけまいと、自分のことを思いやってくれる親心が短い便りのなかに充ち充ちていた。

留守を守っていていてくれる四人。老いた体で百姓は大変だろう。自分がいたらと……。友からの便りも楽しい。「兎追いし彼の山、小鮎釣りし彼の川」の歌の通り、過ぎし日の思い出が蘇ってくる。

一番期待して、一番困るのは女性からの便り。自分にも好意を持っていてくれた女性や女友達のものもありました。「オイ彼女からか」と週番下士官に聞かれ「違います。親戚の嫁であります」とごま

かして逃げ出します。その後、下士官室へ点検を受けに行くと「ヨシ、中の手紙読んでみよ」と言われ読み上げてゆきます。

愛しいあの娘が忘れられぬ

トコ ズンドコ ズンドコ

自分も在満当時は随分手紙を出しました。父母、友達と結ぶたった一つの手段だから。とくに家に出す手紙には気を使いました。親だけには絶対心配をかけたくないとの思いを託して、両親共に文字は読めないから姪の読めるように書いた手紙。親達が姪の前で読む声に耳をそばだて、どんな思いで聞いてくれるのだろうか、胸を熱くしたものでした。

厠 かわや

「厠」は初年兵にとって息抜きのできる唯一の憩いの場所です。厠はトイレのことです。あんな臭い匂いのするところが憩いの場所とは、と思わ

れるでしょうが、これも軍隊経験のある方ならお判りでしょう。自分が満州に入ったのは一月で、それから四カ月位は厠に入っても大の方も小の方も、出したものも、匂いも忽ち凍ってしまえますから、ご心配なくという場所です。支給された甘味品（羊かん）を、味わいながら食べることができると、髭を剃るのも、一番ゆつくりできて有り難いところです。

「河村二等兵！ 厠に行つて参ります」。意地の悪い古参兵が「聞こえんぞー」「河村二等兵！ 厠にいつて参ります」「声が小さいッ！ どこへ行くと！」

「河村二等兵！……」三、四回大声で叫ぶようにすると「よーし」。

厠の大の方に入り扉を閉める。ここだけが邪魔する者もない、独り天下でホツとする。しかし、あまりゆつくりもしておれない、他の初年兵に負担が増えますから。本当にゆつくりしたい時は消灯後に行きました。

厠掃除は自分達初年兵の仕事です。ホウキ、鉄棒、スコップ、モッコ（担いで物を運ぶもの）を持って行きます。大の方は凍って鐘乳石のように積み重なり、屈むと尻につかえる程になっているから鉄棒で叩き崩します。便槽がいっぱいになっているときは、小も鉄棒で突き崩し、大小ともにスコップでモッコに入れて、二人で担いで宮庭の隅の捨て場に運びます。突いたり、崩したりするとき充分注意をするのですが凍った破片が飛び散り軍服や顔などに付着します。作業が終わり兵舎に帰りますと、破片が解けて、あの匂いを舎内に撒き散らすことになる厄介者でした。

厠と言えば、こんな辛い出来事がありました。入隊して間もなくの二月のある日、夕方の点呼の時、初年兵一人が整列しておりません。班長はじめ皆が慌てました。週番士官の点呼は班長がうまぐごまかして切り抜けましたが、それから大変です。勿論班の舎内にはおりません。班全員で探し見つけました。厠の壁板にもたれて、東の方を

向いてブーツとしていました。彼にとっては余りの激務に頭が参ってしまったのです。

さすがの鬼班長も怒らず、班全員に何事も強要せず注意するよう伝達されました。正気を取り戻した彼は初年兵の自分達が忙しく走り廻って仕事をしているのを、一緒になって仕事はしてくれていました。初年兵係も古参兵も彼には腫物のように、彼が何をしていてもそつと見守ることにしていました。二月も過ぎ三月初めの夕方の点呼の時、また彼がいまません。班内にも居らず、もしや、また厠ではと前回の場所に行ったがいらない。そこで厠の中を扉を開けて調べましたら、梁に帯革をひっかけて首つり自殺をしておりました。彼としては軍務に堪え切れなかったのです。故郷の両親には『病死』と通達されたと後日聞きました。しかし、その後の初年兵は以前と変わりなく激務に追われ通してました。

酒保

酒保は日用品や食べ物を売っている。自分は甘党だから「あんまき」の夢をよく見ましたがここでは売っていない。汁粉、ドーナツ。羊羹があるが、初年兵ではなかなか買えない。日曜日といっても朝から暇がある訳でもない。洗濯は戦友の兵長（炊事に行っている）と二年兵の一等兵の二人分と自分の分もしなければならぬし。靴下の破れも直し、故郷へ手紙も書かなければならぬし、使役にも出なければならぬで時間がない。やつと少しの時間があると、飯盒を下げて酒保へ飛んで行くが、その頃には汁粉、ドーナツは売り切れ、自分是要領が悪かったのか一度も買えたことはなかった。戦友の買ってきたのを分けて貰った位だった。

一週間に一回、酒保品として日用品、タバコ、甘味品が渡される。渡されたからといって、大っぱらに食えない。食う暇があったら仕事をしろだ。そこで一刻の憩いの場所厠で食うことになる。

慰安会

部隊では一カ月に一回位あったと記憶していますが、慰安会が開かれておりました。この時ばかりは階級のこととは忘れて飲めや歌えということでしたが、最初はいつものことです。そんな調子にはゆきません。班長が「オイお前達、今日は無礼講だ。遠慮せずに飲め」と言うのですが、兵長が「ハッ頂きます。まず班長殿から」酒を注ぐとぐつと飲み干して

いやじゃありませんか軍隊は

カネの茶碗にカネの箸

お釈迦様でもあるまいしー

一膳めしとは情けなや

と歌い出します。兵隊達もこれにつられて湯呑茶碗の酒を飲み、アルミ茶碗を叩いたり、大ヤカンを持ち出して来て、チンチン、カンカンと音頭をとり合唱となります。勇猛と謳われる関東軍に似ず、慰安会には不思議と軍歌は歌われなかった。

毎日、女気のない男だけの社会、どうしても気持ちの上でギスギスしたものがあからか、それを発散させるために、いろいろなワイ歌や替え歌がつぎつぎと出てきます。自分は一滴も酒は飲めないで、出されている羊羹や饅頭をほおぼりながら、皆に合わせて音痴の声を張り上げておりました。

「ひとつつ出たワイナ ヨサホイノホイ……」

一人の兵隊が歌い出すと、次から次と出てきます。

「サアあなたとわたしはスズリのスミよ

サヌユイユイ……」

チャンチャンたたく者、ハチマキして踊りだす者、乱痴気騒ぎになります。

愛しい奥さん、可愛い彼女を残して、海山遠く隔てた満蒙の地で、こうして歌いながらも涙を流す兵隊もありました。極端に自由を束縛されたやりきれない男の世界の、儂くも悲しいささやか

な憤りと抵抗だったと思えてなりませんでした。父と母、甥、姪が臉にちらつきます。最期の締めくくりは決まっつて

お国のためとはいいながら

人の嫌がる軍隊に

召されていく身の哀れさよ

可愛いスーちゃん泣き別れ

外出

一期の検閲が済んで、外出ができるようになった。外出すると飲めないから菓子屋ばかり廻るが、余り美味しいものはなかった。月給十五円では物が高くてあまり買えない。兵寮で一品料理のハヤシライスかカレーライスを食い「おきよ」という喫茶店で三口もすれば無くなる。一杯六十銭の「汁粉」を二、三杯飲み、映画を見て帰るくらいだ。一里余りの勃利町まで、駆け足で外出するのは、さして楽しいとも思わないので、三回ほど外出しただけで、いつも日曜日は隊内において、床に寝転

んで本を読み過ごしていた。

検閲直後一等兵に進級し、新兵も入ってきたので時間の余裕も心のゆとりもできるようになった。

動員令下る

六月にやつと一期の検閲が終わり、自分は一選抜で二つ星の一等兵となりました。襟章は自分で付けるものではないと言われ、戦友の一等兵に頼んだら「班内で一番の三年兵の兵長殿にお願いせよ」と言われるままに頼みましたら「河村、お前のような者が良く一選抜になれたな。まあよし、襟章を出せ」気持ち良く星を一つ付け足してくれて「おめでとう。頑張れよ」と優しく言っつて励ましてくれた。

これで一等兵殿だ、やれやれと思った間もなくの八月一日、部隊に動員令が下りました。行く先はフィリピンとの噂。部隊内は騒々しくなり出動準備に大童だ。

しかし、自分は残留組という。中隊の庶務係准

尉のところへ頼みに行った。准尉は「行くも残るもお国のためだ。河村は後から来る者達のためしつかり頼む」と断わられてしまった。

威風堂々、兵隊が乗ったトラックの隊列は営門からエンジンの音を響かせながら出て行くのを羨ましく、略帽を高く振りながら見送った。シベリアから復員してから聞いた話では、部隊の輸送船団はアメリカの潜水艦により大半が撃沈され、海難を逃れフィリピンに上陸した部隊は激戦に次ぐ激戦で、マニラの西方でほとんど全滅状態であったと言ふことです。自分もあの時出動していたら、今日の自分は無かったと思うとき、水漬く屍、草むす屍となった戦友たちに申し訳ない気持ちと、今の幸せとの感情が入り混じって何とも言いようのない気持ちで心が重くなります。ただただ亡き戦友のご冥福を祈るばかりです。

中隊で上等兵一人、自分の一等兵。あとは一つ星の補充兵十四人のみとなりました。

転属

八月十五日になって、関東軍第一三〇四一部隊に転属になりました。この部隊は戦車隊です。自分は機関銃手と通信手との兼務を命ぜられました。その時感じたことで、今でも記憶にあるのは食事のことです。歩兵の時は飯も副食も量は多かったです。ですが、特に副食は大根の切り干しを煮た物など安上がりの物が多く、肉や魚は一週間に一度位だったと思いますが、戦車隊は一日に必ず夕食には肉か魚が付いていたことです。

自分が配属されたのは中戦車で、操縦手は秋田県農家出身の少年戦車兵で、阿部という十八歳の伍長でした。

間もなく牡丹江市南の寧安にある通信教育隊に三カ月間の通信教育を受けるため派遣されました。

『・ー(イトウ)・ー(ロジヨウホコウ)。
ー(ハーモニカ)』

のモール信号の取得ですが、言葉で言ってもキーを叩くときは、うまく手首が動かない。三カ月目

に入る頃、やつとどうにか、ゆっくり打てるようになりました。

この教育隊に在る間、ほとんど日曜日の外に行った所がある。それは近くに牡丹江が流れていて、堤防上には赤や青、黒の原色で彩られた娘々廟が建っており、それが川面に映えて揺れている。また川辺近くに大きな枝垂れ柳が数本植えられて垂れた枝先が悠々と流れる川面に戯れている様は、まさに異国情緒たつぷりで、堤防に寝転んで数時間経過したものでした。

平成十三（二〇〇一）年に、十三日間かけて原隊のあった勃利、寧安、奉天等を訪れたとき、勃利は跡形もなく全部畑になっており、寧安野通信教育隊跡は煉瓦工場になっていて、当時の面影を偲ぶものは何も無かったが、寧安の憩いの場所は現存していて懐かしさに胸が踊りました。

それから生々しく記憶に残っているものに、野外の通信演習のとき、墓場に入りこんだときです。あちらでは棺は土中に埋めることなく、地上に放

置されていました。富のある家は豪華な彫刻や色彩を施した棺。貧しい家は薄っぺらな簡単な棺が小さな丘に無数に置いてありました。それが、何も喰うものとなない冬の時期に、山犬や狼の仕業だろうか棺が喰い荒らされて、遺体も外にくわえ出され喰い千切られて散乱しているさまは、日中とはいえ鬼々迫る思いをしたことが印象に残っています。

引き続き奉天に派遣

十一月二十五日、無事に教育を修了したとき、中隊から六人来ていましたが、自分一人が引き続き奉天にある関東軍通信教育隊に派遣を命ぜられました。そして部隊から来た六人が奉天に向かいました。奉天から三日位かかったと思う。さすがここは三階建ての煉瓦造りの立派な建物で北陵の近くにありました。

平成十三年の個人旅行のとき、ここへも立ち寄ったのですが、現在は『將軍』と名付けられています。

る公園になっていました。

さて、建物は立派だったが入室して驚きました。暖房する炉が故障で部屋の中で零下一二度。室内にツララが下がっているのはガツカリしました。勿論入浴もできない。一週間程は部屋で防寒具一式を身につけて震え通しました。お陰で入隊以来、いや生まれて初めてシラミがわきました。このシラミはなかなか退治できず、ここにいる三カ月間は毎晩シラミ退治に精をだしました。

全満州各地の部隊から派遣されて来ていますが、和気あいあい和やかな生活が続きました。教育されるのは通信機の修理の会得でした。通信機等は小学生の頃に鉱石ラジオを作ったくらいのもので、初めて目にする物、手にする機器で不安を覚えめました。コイル巻に一苦労させられたり、今でも意味が判らない「ズイテンモクタン」とあだ名のある面白い教官がいて、判り易く組立てや修理個所の点検、整備を教えてくれて、ここで三カ月間はシラミを除いて楽しいものでした。

十二月に一選抜の上等兵に進級したことは、事務室に俸給を受取に行き、十八円余りになったことで判りました。

夜中に非常呼集がかかり装具をつけて、北陵一帯にかけて、不良満人（ニーコ）狩りのため夜明けまで震えながら搜索しましたが、一人も捕まらなかったことや、B 29 が七十機来襲しましたが、ほとんど損害はなかったこと、満州事変発端の地、盧溝橋を見に行き鉄道敷地に二メートル幅くらいの溝があるだけで、他に見応えするものはなく、ガツカリして帰ったことなどが思い出されず。

原隊復帰

昭和二十年三月末に教育が修了して原隊に帰る途中、ハルピンで乗り継ぎの関係で十時間ばかりありました。自分達の部隊から来た六人で市内見物をしました。まず明治の元勳の伊藤博文公が暗殺された場所を見ました。そこは鉄柵で囲まれていました。

白系ロシア人の居住する地域に入って行きまして。なんとなく明るい感じがします。ちょうど夕方、ネオンの輝きが美しかったです。

牡丹江市は美しい街で落ちていました。ここでまた乗り継いで北上し原隊に着きました。帰隊して先ず感じたことは、なんと騒々しいことかということでした。

六カ月留守している間に自分は班換えになっていました。自分より半年後に入隊したという上等兵に一等兵が二人。あとは初年兵と召集された補充兵ばかりで、自分が班内では一番の古参兵になることになり、なんとなくおかしかった。

戦車というのは力強く勇ましい感じがします。まして横並びで数十台が疾駆するさまは勇壮そのものの状況です。しかし戦車内は大変です。砲や機関銃の発射する時のガスが充満、そして轟音と振動、たまらない程です。停車しているときは通信もできませんが、動いている時、砲、機関銃の射撃中は全くといっていい程音声にしる信号にしる

聞き取れない程の騒音です。それに冬は冷凍室に入っているようで、やりきれない程です。

戦車内の服装は上下続いている二種の作業衣を着ます。夏はあまり暑いので乗車するときフンドシだけで作業衣を着ていましたが、たまたま服装検査があり見付かってしまい、文句は言われましたが制裁はなかったことがありました。暑くて空気の入れ換えがないので、ガスの匂いと息苦しさで卒倒するほどでした。

ただ一つ嬉しかったことは拳銃を持たされたことです。嬉しかったですね、今なら笑い話ですが、若かったです。

中隊長は一つ年上で士官学校出のバリバリの将校。この橋本大尉というのが銃剣術好きときているから自分達はたまったものではない。朝も早くから「ヤアヤアヤア」。夜も夜間教練といって「ヤアヤア」と、他の中隊からカラス中隊と呼ばれた程でした。三日月の出ている夜の暗さの時、相手の木銃が防具の下をくぐり胸を強く突いた

「ウツ」と呼吸が止まるかと思う程痛かったものです。一晩痛かったのですが、それも三、四日で薄らいでいった、その痕跡が現在もレントゲンを写る度に両肺の上部の部分が白く写りますが、自然に治癒していました。少し走ったりすると胸が苦しくなるのはそのためかもしれないと思っ
ています。

移 駐

六月頃だと記憶していますが、奉天の戦車学校内に、第一三〇四二部隊、第一三〇四三部隊が新設されることになり、それと同時に自分達の部隊も奉天に移駐することになったのです。

移駐したところは奉天の四平街。自分は新設される第一三〇四二部隊に基幹要員として転属になり、司令部の二階、下士官室の隣に移りました。基幹要員は確か三十五人だったと思う。

八月一日に兵長に進級し、同月五日になって召集された補充兵が入って来て、その教育係となっ

て間もなくの同月九日、ソ連軍が侵入し、同月十日終戦となりました。

終戦から復員までは財団法人全国抑留者協会発行の「平和の礎」平成十三年三月三十日発行に掲載されていますから省略します。

私の軍隊略歴

昭和十九年

- 一月二十五日 中部第二十二部隊入隊
- 二月 十二日 関東軍第一九三部隊入隊
- 十五日 勃利陸軍病院入院
- 三月 同病院退院
- 六月 一期検閲
- 七月 一等兵に進級
- 八月 一日 動員令下る
- 八月 十五日 関東軍第一三〇四一部隊転属
- 十月 一日 寧安通信教育隊派遣
- 十一月二十五日 同教育終了

十一月二十六日 関東軍通信教育隊派遣
 十二月 一日 上等兵進級
 昭和二十年
 三月二十五日 関東軍通信教育隊教育終了
 三月二十六日 原隊復帰
 六月 部隊奉天に移駐
 八月 一日 兵長進級
 八月 一日 関東軍第一三〇四五部隊転属
 八月 十五日 終戦
 九月 三十日 黒河よりブラゴエシチェンスク渡河
 十月 十日 タイシエツト第四收容所
 昭和二十二年
 四月 十日 收容所出発
 四月二十二日 ナホトカ港到着
 五月 十七日 同港出港
 五月二十一日 舞鶴港到着
 五月二十五日 帰宅

【解説】

体験記執筆者は、昭和十九年一月、中部二十二部隊（元歩兵第八連隊）に入隊。

この大阪の中部二十二部隊には十一日間いて、「明日は原隊のある満州に出発する」と知らされる。原隊名は「満州第一九三部隊」という。午前十時、隊伍を整え臨時編成の中隊順に新兵九百人は晴の門出の一步を踏み出した。

昭和十九年八月、独立戦車第三十四連隊に配属され、一時通信兵教育を受ける。昭和二十年八月、独立戦車第一旅団工兵隊に転属する。

この独立戦車第一旅団は戦車第三十四、三五連隊、及び旅団歩兵隊、砲兵隊、工兵隊、整備隊の編成で、関東軍 第三方面軍に属し、奉天駐屯の部隊である。

筆者はこのような部隊の中での軍隊生活を描き続けた。